

2. 近親相姦の謎

もしくは

『ルーゴン・マッカル叢書』における科学と神話の矛盾

「第二帝政下における一家族の自然・社会史」¹⁾を書くことによって、エミール・ゾラは、文学において遺伝の原理に主要な役割をあたえることを意図していた。それは同時に、登場人物の特徴づけの要因として、物語の酵母としてであり、そして最後に登場人物たちおよびあらゆる逸話をたがいに結びつけて膨大な社会のフレスコをえがく導きの糸として、であった。遺伝と環境という二重の法則によって社会のスペクトルの全域を解きあかすと見なされる小説、同一家族の多様性をダーウィンの適応および淘汰の法則——人間社会に自由に移しおかれる——で証明すると考えられる小説、これが作家のめざすものであった。ところが、遺伝的事実に由来する禁止、そこから生まれる悲劇にあてられる役割があまりにも小さいことに驚くべきではないだろうか。とりわけ近親相姦 (inceste) のモチーフは、『ルーゴン・マッカル叢書』を通じて周期的にあらわれるとはいえ、そこで背景の役割しかはたしていない。これは現象についての作者の無知として片付けることはできないし、タブーの重圧によって説明することも困難に思われる。『大地』の作者が、この点に関して「沈黙という集団的因習」²⁾に甘んじて従い得たとはとうてい思われないのである。

もちろん小説作家は、たとえ自然主義者であるとしても、その作品にあるかもしれない欠落のゆえにとにかく言われる筋はない。問題の欠落は、もし近親相姦が、批評によって全体としてゾラの哲学的遺書とみられている叢書最終巻で前面にあらわれるのであれば、我われの注意を引くこともなかったであろう。また、もっと奇妙な逆説だが、このドラマの二人のパートナー、ことに「作品中で立派なバランスのとれた男性」³⁾であるパスカル・ルーゴンが、作家自身うちあけているように、一族のなかでいかなる遺伝的な欠陥もない数少ないメンバーでなかったとしたら。

そこには矛盾が、自ら認めないいくつかの意図が絡み合う想像の結節の一つがあるかに見える。それを少しずつほぐしていくことによって、筆者は、作品の意味作用がおそらく賭けられているところの中枢点の一つに到達したいと思う。

言葉と事物

まっさきに言葉が問題になる。そして作品群を横断する一瞥によって、われわれは解明される点よりはむしろ不確実な事態を見出すことになる。「一族の早すぎる疲弊のしるし」⁴⁾であるマクシムとルネとの頽廢的で倒錯した情事は、この「近親相姦」という語の烙印をおされる。ところがこの二人、サッカルルの息子とサッカルルの後妻とのあいだには血縁関係はまったく無いのである。もちろんラシーヌの先例をあげることはできよう。『フェードル』の物語が『獲物の分け前』の粗筋となったのであるから⁵⁾。もっともゾラにおけるこの語の共示（コノタシオン）に注意すれば、兩人の関係のもつ道徳的に極悪の性格を告発するためには、より正確な「密通」(adultère) という語よりはむしろ「アンセスト」のほうが相応しいと推測できる。ルネとマクシムとが次第にそこへとすべり落ちていく不義は「長期にわたる絶え間のない頽廢」⁶⁾の結末であり、「まるでいかがわしい液でねばつく^{きゅうひ} 厩肥の上に生まれ」⁷⁾、「放蕩という特別の環境のなかで異様な洗練をともなつて成長した」⁸⁾ 過ちなのである。そして温室の途方もないまがいものの自然のなかで、

十二月の明るい冷気の中にまぎれこんだ、眩い夏の光でたぎるそのガラスの檻のなかで、彼らは、あたかも熱くなりすぎた土壌からうまれた罪ある果実のような不義を味わっていた。彼らのもちいる臥所^{ふしど}にひそかな恐れを抱きながら⁹⁾。

禁じられた罪ある恋の序列の中で、この種の性関係は最高度の背徳であつて、頽廢そのものに飽きた魂になおも欲情をよびおこすことのできる唯一の違反なのである。さらにこうも言われている。

くすぐりにも似た漠然とした近親相姦という思いがうかんだのは、秋のこの散歩の途中でだった。それは皮膚の表面に経験したことのない震えをおこした。夕方、食事ではろ酔い状態になっているとき、嫉妬による興奮のなかでこの想念は明確になり、温室の炎のあいだで彼女の前に熱っぽく立ちあがった。(...) その時彼女は悪をのぞんだ。誰も犯すことのない悪、彼女の空虚な生活をみだし、それをついにはあの地獄に投げこむことになる悪を。(...) 彼女は自分の意志によってそれを受けいれた。強くもとめた。後悔する——もし万が一そうなるとしたら——にいたるまでそれをとこ

とん味わいつくすつもりだった¹⁰⁾。

語は、あるタイプの禁じられた関係よりはタブーの観念を、その恥辱の刻印とともに指呼するために用いられているのである。

同様にゾラは、マルト・ルーゴンとフランソワ・ムーレとの結婚（『ブラッサンの征服』）にこの語を適用することを避けている。合法的な親等にあるとはいえ、彼らの結合は血族結婚のあらゆる特徴をそなえている。すなわち、

「（…）二十歳のころわたしたちは兄妹だと思われていました。結婚したのはそのせいだと言えなくもないのです。（…）びっくりするほど似ていたものですから、あの尊敬すべきコンパンさんは、わたしたちのことは御存知なのに、それでも結婚させるのをためらわれたほどでした」

「しかしあなたとあの人とは従兄妹なんでしょう」、司祭はたずねた。

「そうです」、彼女は少し赤くなりながら言った。「夫の姓はマッカールで、私はルーゴンです」（…）

「とても奇妙なのは、と彼女は自分の当惑を隠すためにつづけた。わたしたち二人とも祖母に似ているのです。夫には母親をつうじてそれは伝わったのですが、わたしの場合は先祖がえりなのです。父をとびこして祖母に似てしまったのです」¹¹⁾

ところで、遺伝のメカニズムを例証する典型的な一族のドラマであるこの小説は、ルーゴン・マッカール両家の系統樹における唯一の、しかも証明にとって不可欠の結び目となる二本の枝の交わりを物語っていて、それはゾラにとって、緊密すぎる親戚関係にある配偶者たちの子孫をおそう生物学的変質を証明する機会となる。ムーレ家の三人の子供のうち、デジレは万年幼女のままとどまり、セルジュは、パスカル医師が新しいタイプの治療を試みるまでは神秘主義——ゾラにとっては由々しい変調の形態である——に陥るおそれがある。オクターヴだけは、マルトとその夫とが次に犠牲となるところの先天的狂気をまぬがれる。実験は完璧である。欠けているのは名称をあかすことだけである。

こうして、近親相姦の本質的な二つの側面、血縁性と社会的な禁止とは完全に分離されていることを認めなければならない。ルネとマクシムの^{ルネ}邪な関係

はけっして近親相姦ではない。マルトとフランソワ・ムーレの婚姻は生物学的には同族婚であるものの、パラドックスであるが社会的には非の打ちどころがない。一方には近親性のないタブー、他方にはタブーなき近親相姦がある。一方には内容なき概念が、他方には概念なき現実性が。

ところで、問題が正面から全体的に取り上げられることは決してないが、そのモチーフなら、辛ろうじて表明されるにすぎないとはいえ、いくつかの作品のなかに執拗に現れてくるのが認められる。たとえば『ムーレ神父の過ち』がある。そこでは、アルトーの住民たちは、村の創立いらい教会の教えにそむく族内婚の習慣によって繁殖しているのだが、血筋の頹廃などはいささかも見られない。すなわち、

あらゆる住人が親類で、みなが同姓だった。そのため彼らは揺籠の時代から互いを区別し合うために渾名をもらった。アルトーという名の一人の先祖がこの荒地にやってきて、賤民のように住みついたのだった。それからその家族は岩石から生命を吸い取る雑草のように猛烈な力で大きくなり、一部族となり、一村落をなすにいたった。親戚関係は何世紀も前にさかのぼって分からなくなっていた。彼らは見苦しい雑居状態の村の中で結婚していた。この狭い土地にしがみついて、己の種からふたたび生えてくる単純な木々のように、自分たちの糞尿の上でゆっくりと増殖しながら、生まれ死んでいくのだった¹²⁾。

『大地』の農民たちもまた何世紀も前から「頑固で強靱な植生のように」¹³⁾ 繁茂してきている。パルミールとその不具の弟イラリオンのことを思いだそう。この二人のパリアは、社会的な排除のせいでもあれば本能の暗い命令にしたがってでもあるが、接合へと駆り立てられる。

「あたしあの子の姉だけど、嫁になったっておかしくないわ。女の子たちは誰もあの子を受けつけないんだもの」

告白とともに、彼女の頬には二筋の涙がながれた。不具者にたいする母性愛からくる悲しみの涙だった。それは不義にまでおよんでいた。(…)大地に近い人間、恋とは縁のない賤民の暗い知性の奥底で、彼らには一体どうしてそうってしまったのかを言うことはできなかっただろう。それは、考えたうえでの同意などではない本能的な接近だった。獣じみた苦しむ男と消極的で何もかも受けいれる女、あばら屋のな

かで震えていた二人は、暖をとる喜びに身をまかせたのだった¹⁴⁾。

ゾラの想像世界において近親間の性交渉は、社会的・道徳的な掟の手前にあるムキだしの自然の衝動である。きわめて大地に近く、身体的にも精神的にもまだ半ば動物性にうずもれたプリミティヴな若者たちが従うことのできる唯一の命令、つまり最も原始的な恋愛の形態なのである。

遠く、エーグル川の岸辺で一匹の犬が吠えていた。それから彼女は思い出した。日が暮れてからずっと、パルミールの死体のそばでイラリオンが吠えていたことを。人々は彼を追っばらおうと努めたが、彼は死骸にしがみつки、嘔みつки、放そうとはしなかった。それは姉であり、妻であり、彼の全てであった。彼はいつまでも吠えていた。吠え声は夜のしじまを満たしていた¹⁵⁾。

法律の此岸に、したがってまたあらゆる懲罰の手前にそれはある。それゆえにこそ、良識ある人物ジャンの判断を通して彼らの罪は許されることになる。Hく、「あの人の言うとおりで。それが俺たちに何の関わりがある。(…)あの人の問題だよ。誰にも迷惑はかかっちゃいない」¹⁶⁾

これまでに引用したいくつかの事例を比較すれば十分である。矛盾はあきらかである。同じ「アンセスト」なる用語が、似ても似つかぬ関係を指示するために使われている。それはある場合には緊密な血縁を、別の場合には姻戚関係を意味するし、ある人々にとっては容認される関係となり、他方では違法で罪あるものとなる。けれども、小説家が同じ語を用いるのであれば、同じ隠喩の網（熱気、闇、大地、堆肥、頑固な植生）がこれら全ての物語を覆っているのであれば、それはこれらの隠喩が想像の論理にしたがって交差し合うということであり、同じ法則を例示するということである。この事態は対立し合う価値をになっている。それは原初の無垢であり、同時にまた究極の侵犯である。しかしそれがまさに自然法則の現れであるという考えを念頭においてさえいれば、マクシムとルネとが生活している歪んだいがわしい騙し絵の世界では、自然の状態にもどろうとするあらゆる企ては倒錯した仕方ではしか実現できないこと、そこでは近親相姦は絶対的な侵犯の象徴になるということが理解されるのである。

しかし先立つ例のすべては同じ論理から生じてはいない。明らかにゾラは、習慣によって聖別された従兄妹同士の結婚をこの語を用いて形容することに怖じ気づいたのである。それでもしかし、マルトとフランソワの結婚が退化を証明する例となることに変わりはない。一つの矛盾が輪郭をみせているのが分かる。一方における近すぎる血筋の混合で誘発される衰退と、他方における遺伝の理論をものともせず繁殖するかぎりない種の生命力との間の矛盾である。これは『パスカル博士』（1893年）において白日のもとに姿をあらわすことになる。

問題としてのパスカル博士の近親相姦

これは良心的な科学者にして私心のない臨床医であり、作品中で享楽にむかって殺到する時代にたいして超然としている唯一の登場人物である。なかば隠遁のうちに過ごした謹厳な生活のあとで、60歳をすぎて、手ずから育てた姪のクロティルドに惚れこんでしまう。彼にとって彼女は養女以上のもの、弟子にして友である。生涯を遺伝の法則の研究にささげ、近親交配の重大な影響に精通している学者が、非難されても仕方のない情熱に身をゆだねる。作家がその欠陥のない清廉潔白さをしめすことに腐心する男が、社会によって排斥される事柄で咎をおう身となるのである。そこにはこの人物を理想化しようとする公然の意志にそぐわない逆説がある。もしゾラがパスカルを汚点のない人物にしたかったのであれば、なぜ普通には「汚らしい」と見られる事件に彼を投げこむのか。もちろん、情念が最後には美徳に服従することになるコルネイユばりの葛藤を意図したのであれば、話は別だが。ところがそんなことはない。それにゾラは問題を避けたがっているような印象をあたえる。もちろん廉直の士であるパスカルは、姪にたいする自分の愛情の真相を発見するとき、戦^{たたか}わずにはいられない。

とんでもないことだった。自分はどうなるのか。兄にまかされて、優しい父親として育てたあの小娘。それがいまや 25 歳の誘^{いざな}う者、この上なく強い女となっているのだった¹⁷⁾。

だが、自分の犯しつつある「最悪の犯罪、背信、下劣な誘惑」¹⁸⁾ に対するこの束の間の嫌悪感よりも強い力で、また別の疾しさが彼をひきとめる。どう考えてみても明らかに無理なのであって、超えられない距離があるという思いの方が、生物学的に遺憾で道徳的には非難される事情よりも彼の気を重くするのである。叔父・姪の関係よりは世代の違いが。

駄目だ、駄目だ、忌まわしい。不可能だ。彼は白くなった髪毛を自分の頭にまるで氷のように感じるのだった。59歳という年齢がおぞましい。あの子はといえば 25 歳ではないか¹⁹⁾。

パスカルの方では、近親相姦という思いはすぐに背景に追いやられる。クロティルドの方では、二人の間に血縁はまるでまったく存在しないかのように、この考えが生じることすら決してない。じっさい、「彼女には馬鹿ばかしいと思われる「叔父」や「代父」という言葉をつかわないために、姪は叔父を「先生」(maitre) という信頼しきった言葉で呼んでいたのだが、情愛ぶかく従順で、あまりにも優しいこの語は」²⁰⁾、彼女にとって同族の関係を消しさってしまう。いささか儀式ばったこの用語と「君」をもちいる親密な話し方——それは語のもつ堅苦しさをやわらげる——との独創的な結びつきは、やや家父長的な権威および同意した従順さにもとづく師弟間の愛情を暗に示している。そして親戚の絆などまったく無関係である。クロティルドは言う——

あたしはあなたの召使、あなたの作品、あなたの財産だわ²¹⁾。

そしてパスカル、

僕の作った君、君は僕の生徒だ。友だ。もう一つ別の僕の思想だ。そこに僕は自分の心と頭脳とをすこしずつ分けあたえた²²⁾。

家系図を解釈すれば、事態はさらにこみいってくる。父子関係ではルーゴンに属するとはいえ、クロティルド・サッカル（ゾラが登場人物を成り行きま

かせに名付けたりしないことは知られている)は、その母アンジェール・シカルドに生き写しであり、祖父シカルド隊長から真っ直ぐな心とエネルギーとを受け継いでいる。一族の各構成員に関するパスカルの覚書によって、両人が系図のなかで占める位置の正確な意味を評価することができる。たとえばクロティルドについては、「優性な母親の形質。反転した遺伝で母方の祖父の精神的・身体的影響が際立っている」²³⁾と指摘されていて、彼女はいわば一族から引き離されているのである。同じことはパスカルについても言える。ゾラはこれを「本有性」(イネイテ)、つまり「両親の身体的・精神的特徴が融合してしまい、彼らのもっているものが何ひとつとして新たな存在者のうちに見出されないかのような結合」²⁴⁾の唯一の例とすることによって脇におくのである。本人は自分のことをこう語っている。

ああ僕か。僕のことを話して何になる。違うんだよ僕は。一族の者じゃないんだ(…)母はよく言っていた。僕は違うって。どこからやって来たのかわからないって。(…)町で僕が一度でもパスカル・ルーゴンと呼ばれるのを聞いたことがあるかい。いいや。世間はいつもただ単にドクトル・パスカルと呼んできた。僕が違うからだよ……これはあまり優しい振舞いじゃないかもしれない。だけど僕にとっては嬉しいことなんだ。じっさい受け継ぐには余りにも悪性の遺伝だからね²⁵⁾。

念には念をいれて、パスカルとクロティルドの双方を一挙に親族から除外する。これこそは近親相姦の非難をたくみにかわしてしまうことではないだろうか。もちろんパスカルも間違えることはあるかもしれない。しかしこの医学者は、ゾラの目には格別の知的・道徳的権威を付与されていることを忘れまい。それにこれは自然主義派が考える意味で小説家の分身であって、小説家と同じ機能をはたすのである。すなわち資料を収集し、カードを作り、一件書類を作成し、記述し、分析し、そして解き明かす。それも客観的に科学的に。「分身」というより、小説家が見習おうとつとめ、その主張を福音書の言葉とも見なさなければならぬ「規範的モデル」というべきである。ゾラの定めていた目標――

いかなる法則にしたがって生命は、一つの人間集団のなかで、環境を考慮にいれつつ、一人の人間からもう一人の人間へと数学的に分配され導かれていくのか、を確定

を実行するのはパスカルである。それゆえ、たとえ彼が疑惑や失望にとらえられることはあるにしても、彼による解釈が誤りうると想像することは難しい。ところがパスカルの不可謬性を措定したとたんに、近親相姦の問題は解きほぐせないものとなる。

ゾラ自身はこの語を決して用いることはない。それに彼の説得力には絶大なものがあるため、この面を忘れてしまって、「60歳代の男と25歳の少女との間の季節おくれの恋愛」²⁷⁾しか見なかった批評家もいる。「年齢の不釣り合いにもかかわらず、余りにも深く一徹な情熱であるために、そこに正常でないものがあることを忘れ」²⁸⁾してしまうのである。また別の批評家はこの恋が本当らしくないことを巧みに皮肉り、そして勘違いすることなく、そこには何か当を得ないものがあると付け加える。

これら旧約聖書の思い出はりっぱな飾りではあるが、クロティルドのパスカルとの性関係を聖別するには十分ではない。我々に抱かせる嫌悪感を緩和してくれない。そこには距離、遠隔、伝説的な古代性が欠けている。夜の間にボアズの額にふれる天使の翼が、である。それにパスカルが惚れこみ愛されもするのは、ありきたりの娘ではない。ごく幼少期に彼がひきとり、20年間にわたって父親の役目をつとめてきた自分の姪なのである。たとえ娘の方が彼に身をまかせてくるとしても、これを犯すとしたら、そこには背信以上のもの、下劣な着服以上のもの、じっさい一種の近親姦があるのだ²⁹⁾。

一方で作者の天分に感嘆しつつも、パスカルとクロティルドとの関係を道徳の名において、また同様に古典的な真実らしきの原理の名において告発する者もいる。

もっと悪いのは、そして自分の娘に恋する父親よりもっと真実らしくないのは、自分の父親への情熱で錯乱する娘である。(…)私は、いかなる文学においても、この近親相姦より以上に醜怪でかつ本当らしくないものを知らない³⁰⁾。

この評者の驚きは、もしかしたら単に一般教養の欠如から来るのではないだろうか。ともあれ、批評にみられる動揺は作品の不確かさに由来する。

それほど小心翼翼とはしていないというより、善よりは美にもっと敏感な我われにとって問題は、モラルの言葉ではなく、心理学的な真実らしさのそれでもなく、一貫性の名において提起される。一体ゾラはこの種の結合を望んだのか否か。そしてそれは何故なのか。

『パスカル博士』の生成

作品の生成を知ることによって、いくらか明らかになる点があるかもしれない。まず『パスカル博士』が作家自身のジャンヌ・ロズロとの関係の経緯に大いに着想を得ているとしても、ゾラはそこに注目すべき変形を加えている。年齢差を拡大する一方で身分差を縮小することによって、彼にとって本質的な意味をもつ人生の秋における恋愛および回春の奇蹟を強調したのである。伝記との関連はそれ以上には行かない。というのも、筋の構築は、プレイヤッド版における H.ミットランの研究を読めば分かるが、まったく異なる道をたどるからである。当の作品の制作にとりかかる前、1890年にすでにゾラは、科学者である主人公が敵意ある取り巻きとたたかう一編の小説を書くことを目論んでいた。ゴンクール兄弟がゾラの言葉を伝えている。「それは面白いだろう。僕は、一人の科学者を退歩的で信心屋の女と結婚させるよ。研究がすすむにつれて、女は彼の仕事を破壊してゆくのだ」³¹⁾。

しかし、ボドメール図書館蔵の草案（1892年）では、この当初の計画はすでに放棄されていて、代わってパスカルとクロティルドの友マリーとの純朴な愛の構想が見られる。博士の周囲にいる女性たちはこの役には向かないと思われたのである。例えばクロティルドについて、ゾラは「彼らの間に筋立てを仕組む気はあまり無い」と書いている。またクロティルドを育てたとされる侍女ないし付き添いの女性については、「これを同衾した奥様女中にすべきだとは思わない」³²⁾ と。この第一の構想においては、クロティルドと侍女とは、後にフェリシテの操るマルティエヌに帰属することになる役割を演じていたのである。そしてマリーの方は、まず他の二人と固く結ばれていて、それからおもむろに師の方に近づくはずで、そのことは彼女とクロティルドとが対立する理由

となるのだった。結局ゾラはマリーなしで済ますのだが、それは単に彼女とクロティルドとが無駄に重複していたからであろうか。単に筋を緊密にし、ドラマを単純化するためであったらうか。その配慮があったことに異論の余地はないが、そこには一族の物語をしめくくることになる小説をまさに一族の枠内に限定しようとの願望も重なっていた。すなわち、

だから、とゾラはノートしている。可能なかぎり登場人物を少なくし、その上できることなら全員を家族の中からとりたい³³⁾。

類まれな家族のドラマ。それは共通の曾祖母であるディドおばさんから幼いシャルルまでの 5 世代を対面させる。ディドは血統の源の、そしてシャルルはその頽廢の証人であって、そのほぼ同時期の相似た死によって物語は完全な輪をなして終結する。三つ巴の抗争で対立し合うのは、一門の名前の榮譽をまもることに汲々とした祖母フェリシテ、真実のみに気をつかい、独自の法則にしたがって展開する有機体としての家系にしか興味をもたない息子パスカル、そして、彼女がいずれの側につくかによって均衡はやぶれ、小説の基本的な三つの動きが決定されることになる少女クロティルドである。

このような状況において、ドラマの照準を血族にあわせ、外部の人物は端役にまわすことがいかなる意義をもつか分かるだろう。それでもやはりゾラが、マリーに代わるクロティルドの置き換えによって引き起こされる問題を問わなかったのは奇妙である。「退歩的な妻」の考えを退け、次いで「奥様女中」のそれを、そして最後に愛人たる弟子のそれを遠ざけたあと、アンセストこそが唯一考えられる可能性となるまでに登場人物の関係を緊密にしたあとで、作家が問題を直視しなかったのは奇妙である。まるでそれが存在しなかったかのごとく。

作品の消失点としての近親相姦

解決が無いようにみえれば見えるほど、これは作品において格別の重要性をまとっているに違いないと思われてくる。おそらく別の問い方をすべきであろう。そこに近親相姦があるか否かではなく、むしろ生成の研究がしめす傾向に

あったように、あるに違いないとしたら、それを指呼する語は何故に^{なごころ}発せられてはならないのか、何故にスキャンダルは認められてはならないのか、と問うのである。答えるためには、作品を全体として吟味する必要がある。

周知のように、パスカル医師の物語は複数のレヴェルで展開されている。だが、それらの間の分節は必ずしも感知されなかったように思われる。すなわち、——まず家族のドラマである。作品はルーゴン・マッカール家の人々の物語群を、多くの点で小説家自身に似た登場人物のおこなう理論的説明という形で再び取り上げ、一定数の事件（アデライッドとシャルルとパスカルの死、子供の誕生）をもって劇的にサイクルを締めくくる。同時にこれらの事件によって理論の正しさを確認する。

——科学のドラマ、その自負およびその究極的な無力のドラマ。これを見せるのは、科学者を宗教の影響のもとにある取り巻きの女性たちの敵意に対立させる抗争である。

——最後に、クロティルドを相手に季節終わりの恋の幸せを体験するが、彼女と別れざるを得なくなり、悲しみのあまり死んでいくパスカルの個人ドラマ。

ところで、小説をどの位相で読むにしても、問題をさけるわけにはいくまい。例えば第一の位相においては、不義の果実である子の誕生——これを最後の場面は待ちのぞまれた救い手として提示することを目指している——は、一族のドラマの最終的な意味作用において本質的な要因なのである。

第二のレヴェルでは、異族結婚のもたらす良い結果の確信——ひるがえって同族結婚の悪影響の確信——は、系統樹の解釈においても家族の未来における展開の予見においても、パスカルを導く中心的思想である。彼は言う、

よし、そこに希望はある。つまり外からくる新たな血によって、一族は毎日に再構築されるということだ。どの婚姻も新しい要素をもちこんでくる。良い要素も悪い要素もあるが、それでもとにかく結果的には数学的・漸進的退化はさまたげられる。割れ目はふさがれ、欠陥は消え、数世代もたてば宿命的な均衡が回復する。そしてそこから常に生まれることになるのは平均的人間だ。得体の知れぬ苦勞に執着して自分では分からない目的に向かってあゆむ漠然とした人類だ³⁴⁾。

このような信仰告白を読めば、作者はつゆほども近親相姦を意識していないだけでなく、もし同族結婚の弁護などが万が一導入されるとしたならば、パスカルの理論体系は根底から揺るがずにはおくまいということも容易に想像できるのである。

最後に個人ドラマの面では、近親相姦はパスカルの死をまねく不幸の連鎖において第一の環を構成している。

どの観点から小説を観察するにせよ、それはまさに問題系の中心にある。それは家系の成り行きに、パスカル個人の運命に、そして学者の理論的知見に影響をおよぼすのである。さらにそれは作品の結節点、異なる水準の結合点の一つともなっている。我々に細心の注意を要求する所以である。それゆえ、今や小説をレヴェルごとに取り上げ、その各々について一つの意味を引き出すことを試み、それらの意味が首尾一貫した展望——その中で問題の事態がその矛盾とともに総合されるような——において整合しあうかどうかを考える時である。

どの位相においても、小説は曖昧な終わり方をみせる。この不確かさはとりわけ家族のドラマに関して明白である。アデライッドの死、マッカールの燃焼死、パスカルの断末魔、マクシムの緩慢な破滅、シャルルの夭折をとおして、ゾラは大家族を構成した5世代を次々に消し去る。さらに、特にマクシムおよびシャルルによって例証されるのだが、退行の現象は全体におよぶ。サイクルの終わりにいたるとき、枝をなす分家はほぼ絶えている。マッカール家の人々で生きているただ3人のうち、ポリヌ・クニユは禁欲と不妊を余儀なくされているし、エティエンヌ・ランティエはニューカレドニアで流刑の身である。ジェルヴェーズの弟ジャン・マッカールはブラッサンにもどり、そこで子孫をのこす。ムーレの家系はオクターヴをとおして存続するにすぎない。というのもエレヌ・グランジャンにもムーレ神父にも、またその妹にも世継ぎはいないからである。ルーゴンの枝には生きた小枝は2本しか無い。そのうちサッカールの私生児ヴィクトールは香^{かう}として行方知れず、もう一人がクロティルドの子供である。

退化、不妊、行方不明……、結局どの分枝にも再生の可能性をもつ健全な芽は一本ずつしか残っていない。これは社会全体に影を落していた大木にとって余りにも僅かである。家系の断絶——その死後の誉れを、別の時代の生き残り

であるフェリシテは油断なく見守っているにすぎない——という結論をくだすべきであろうか。確かに生はふたたび出発する。けれども曖昧さはそのまま残っている。再出発するのは生であって、一門ではないからである。

この点についてのパスカルのテーゼは十分に明示的である。彼は、まさしくそこから発して家族の観念が構築された共通の遺伝素質は、わずか数世代もあれば消え去ると断じている。最初の欠陥であるディドの神経症のことを忘れまい。それは、(ほんの僅かの本有性のケース、または別の先祖が優性になったケースを別にすれば) ルーゴン・マッカール両家のほぼ全体に様々な形をとって伝わった。時にはそれは、数世代をとびこえて先祖返りの形でジャンヌ・グランジャンとか幼いシャルルとかに姿をあらわし、そして彼らとともに姿をけした。遺伝形質の分解があるにせよ、再出現や自己破壊もあるにせよ、血族は自然に衰弱するにちがいない。

ただ一つ不安がおこるとしたら、それは遺伝をふたたび活性化しかねない近親交配からである。しかしすでに見たように、ゾラは慎重にパスカルとクロティルドとを血縁から「遠ざける」。最後の場面の幼児についてはどうか。もしかしたら種の^{あらうない、もの}贖主となるのかもしれないその子——「次の時代が待っていた救い主、諸々の民を疑惑と苦しみから助ける救い主となるかもしれない(…)」もし反キリスト、荒廃させる悪魔、むごくも広がりすぎた汚れから大地をきよめる予言された獣となるのでなければ³⁵⁾——は、一族のドラマに解決をもたらさない。退行かさもなくば再生か。だがこの問いには、作品を終える考察の時点においてはもはや大した意味はない。長い引用を読もう。

どうなのだろう、この子は。クロティルドは子を見つめて、似ている点を見つけようとしてつとめるのだった。(…)それからひそかに不安になった。彼女は他人を、恐ろしい祖先たちを探していたのだった。系統図に書きこまれているあらゆる人々、成長する遺伝の葉っぱを繰り広げている人々を。(…)けれどもクロティルドはまた落ち着いた。希望しないことはできなかったからである。それほど心は永遠の希望でいっぱいだった。師が彼女のうちに根づかせた生への信頼のおかげで、彼女は勇敢に確固として立っていた。数々の悲惨が苦悩がおぞましい事ごとがいったい何だろう。(…)続けられまた試みられている生、誰もが良きものと信じてやまない生……人々は不正と苦痛の最中で死物狂いでこの生を生きているのだ³⁶⁾。

くりかえし表明されるこの信条は、最後の作品のみならず、回顧的にルーゴン・マッカール叢書全体を新たな光で照らし出す。子の誕生は家族のドラマに終止符をうつのではない。それは反対に、血筋の枠をあふれでて別次元の意味作用——そこにおいて集団の運命は全人類を動かすたゆみない潮^{うしほ}に合流する——への移行を準備するのである

そしてあれほどの恐るべきルーゴンたちの後で、あれほどの忌まわしいマッカールたちの後で、また一人生まれつつあった。生はもうひとりを創り出すことなど怖れていなかった。永遠性にむかって勇敢に挑戦していた。生はその作業をつづけ、様々の仮説には無関心にその法則にしたがって増殖し、その無限の仕事のためにあゆんでいた。(…)生、奔流となってながれる生、それは未知の完成をめざしてつづき、止まってはまた始める。我われの浸っているこの生、無数の流れや逆流をもち、動いてやまぬ広大無辺の生、果てしない海のような生³⁷⁾。

それゆえ物語は死と生との二重のイメージで閉じられる。レヴェルは異なるので、そこに矛盾はない。家族のドラマは榮譽の場面でおわる。ルーゴン家の名譽のために建てる記念碑の、みずからは過去の亡霊となったフェリシテによる定礎の場面である。しかしこの話には子に乳を吞ませる母のイメージが力強く重なっている。小さな腕は「生への呼びかけの旗のように」³⁸⁾ 立っているのである。家系はきえる。生はつづく。

科学小説の面でも同じズレが見られる。『パスカル博士』の起草を終えつつあったころゾラは、学生総連合を前に講演をしていて、その結論——それは『パスカル博士』の最終章の要約である——は、パスカルがクロティルドに対して主張する「科学の名誉にささげる長い愛の叫び声」³⁹⁾に他ならず、そしてそれはブリュヌティエールにほとんど同様の用語で対抗したゾラのテーゼでもある。けれどもそのことは、小説が論戦においてよりはもっとニュアンスに富む複雑な解答を、それも、合理化に抵抗する要素をも組みこんだ形で劇的にあたえている事実を忘れさせてはならない。こうしてパスカルをクロティルドに対立させる抗争は、多くの面で科学と宗教をめぐる当時の論争を反映しているとはいえ、それに尽きるものではないことに注意しよう。とりわけ忘れてならな

いのは、二人の対立は複雑な段階を経つつ、6 日間にわたる火の夜の連続（シーケンス）を経つつ繰り広げられるのであって、その一局面を他の局面より重要視することはできないであろう。それはまず夜の麦打ち場での出会いの時に勃発し、嵐の夜の間にはいわばパスカル「教授」によってなされる「生に関する教育（レッスン）」へとつづき、ついに男女の結合において解決すると見える。この結合を、ゾラ自身はパスカルによる二重の勝利、すなわち男としての性的能力の再発見および自分の科学的信条の再認識と解釈している。

しかしクロティルドの安堵は完璧であろうか。『パスカル博士』はまた一つの敗北の物語でもあることを忘れまい。「結婚」の夜は深い変貌の最初の道標なのである。パスカルが自分の学問をうたがい、探究をなおざりにし、「世界の幸せを早める夢、自ら介入して万人に健康を保証することによって完成と至福の国の到来を早める夢」⁴⁰⁾、つまり彼の遺伝に関する研究の最終的な理由であった夢を断念するにいたる変貌である。そして、それまでは疾患と死を忌み嫌うがゆえに治療をおこなっていた彼は、ついには自分自身の受苦（パッション）の意味を受け入れるのみならず、理解さえすることになるのである。他方クロティルドが、宗教のあたえる慰めの「本当らしくない子供っぽさ」⁴¹⁾を拒み、生存を正当化するに十分の確信を愛のうちに見出すとしても、彼女は彼岸への心遣いをすてる訳ではない。「世界は感覚を限界とするものではなく、考慮しなければならない未知の一大世界がある」⁴²⁾ という信念である。

そして科学者は、彼女にしたがって自分の新たな信条のうちに形而上学的な関心を復帰させ、測り知れない生の神秘の前に屈伏し、認識の義務を捨て去るわけではないが、理性と知識の限界を謙虚にみとめるのである。第四の夜を忘れまい。これはすべて夜の場面で構成される歩み（第五夜は妊娠の夜であり、最後の第六夜は医学者の死と彼の仕事の破壊の夜である）の頂点となっている。服従するのはクロティルドではない。パスカルの方こそ、自己放棄し、転向し、それまでのあらゆる自負を捨てるのである。長い告白――

ねえ、世の誰にもけっして言わないことを君に言うよ。自分自身にだって声高には言わないことだけど……。自然を是正する、介入してそれを変える、その目的とするところに逆らう。これは誉められた業だろうか。（…）もっと健康でもっと力強く、

僕らのもっている健康と力強さの理想にあわせて形作られた人類を熱望する、そんな権利があるのだろうか。そうやって自分らは何をしようとしているのだろう。この生の大仕事の何に首を突っこもうとしているのだろう。その手段も目的も僕らには分かっていないのに。もしかしたら万事よし。だがもしかしたら僕らは愛を、天分を、生そのものを殺しかねない。(…)

勝利をおさめたのは生への情熱だ。僕はもう生の向かうところに文句をつけたりしない。全面的に信頼して身をまかせる。生のうちに没入する。自分の善悪の観念にしたがってこれを作り直そうなんて考えない。生だけが支配者、生だけがその成すことも向かうところも知っている。僕にできるのはこの生を知ろうと努めることだけ。それをどんな風に生きるべきか要求されているとおりに生きるためにだ……。それから、わかるかい。この生のことがやっと分かるようになったのは、君が僕のものになって以来のことだよ。それまでは僕は真理を他のところに探していたし、世界を救うのだという固定観念でもがき苦しんでいた。そして君が来た。すると生は充実しているし、世界は一瞬ごとに救われている。愛によって、空間をみたく生きとし生けるもの、再生されるすべてのものの莫大な絶え間ない仕事によって……。過つことのない生、全能の生、不滅の生だ⁴³⁾。

パスカルがクロティルドに勝ったのか。その逆なのか。この時から子の妊娠が可能になるのは偶然ではない。それはこの改心という前提条件を必要としていたのではないだろうか。「善」と「悪」についての反省以前（アプリオリ）の確信を放棄することによってしか、生の仕事は成され得なかったのではないだろうか。科学者の優生学的思想において正当化されず、種の生成にとって有害な本能的逸脱の事例としてしか姿をみせない近親相姦は、この新しい展望においては、進化のさだかならぬ一推力として現れる。それは我々の悟性および道徳の観念をこえる。あらたな生の治世において、この現象は、善悪の彼岸で、我々の科学ないしモラルの概念で辛ろうじて理解され、辛ろうじて知覚されるにすぎない。

われわれは、ゾラが語の使用に同意しない理由に到達しつつある。「inceste」なる語は、「道理に外れた」恋の弁明と呼ぶべき件で2度にわたって現れる以外に用いられることはない。作品全体は聖書の老王ダヴィデ——侍女アビガイルの肩に凭れかかった——のイメージによって飾られている。パスカルとクロティルドとの交情にとって絶えず参照事項となるイメージである。それは両者

の恋を予言し、次いで理想化し正当化する。しかしただ一つの、それも近親間
のではない愛の例では証明とするには十分でない。ダヴィデの故事は、聖書の
この上ない権威によって裁可される連想の網の目、アブラハムとその妹サラ、
ルツとその縁者ボアズの例を引きこむこと⁴⁴⁾、そしてそれらは、季節外れの恋
愛もしくは背徳的な情交の一般的な正当化をつうじて、近親相姦を承認すべく
用いられることに気づかなければならない。

強調したかったのか、不注意のせいなのか、それとも両方の理由によるのか、同
じ一つの件がほとんど逐語的に反復されている。最初は前触れとなるのだが、
自分のクロティルドへの想いに気づいていないパスカルが、一人の「恋の巡礼
女」から老骨を温めてもらう王の夢をみる時であり、二度目は夢が現実となっ
た熱愛のただ中においてである。すなわち、

それはたくましい生命力にあふれた一つの民の、拘束をものともしない勢いであっ
た。その働きによって世界は征服されることになる。あまたの犯罪、密通、近親相姦、
年齢も道理もはずれた情交のあいだをぬって、精力がけっして涸れることのないあの
男たち、いつも子沢山のあの女たち、民族の頑固でやたらに増えるあの連続性.....⁴⁵⁾

二度目の出現においてはただ「密通」(adultère)という語のみが抹消される。
そのことはしかし、実際には異質の問題をない交ぜにする意志をいささかも変
える訳ではない。そしてあらゆる混淆の試みの場合においてと同じように、こ
こでも意図的な混同にまぎれて、自由間接話法によって(作家も共同責任をお
うとしても)パスカルの責任に帰せられ、かつ先立つ確信の否認としてしか解
釈できない生命力の一般的弁明のなかで、とりわけ近親相姦を復権させること
が必要なのである。

環境との相互作用における遺伝のメカニズムの証明をめざしていた科学小
説は、一見したところまたもや矛盾によっておわる。とはいえそれは、この別
の水準への移行を意識するならば矛盾ではなくなる。すなわち、確かにパスカ
ルは勝利する。死後にすら。というのも彼自身の死、それにマクシムの死は彼
の医学者としての予言の目くらむばかりの立証なのである。けれども他方、
パスカルは自説をすてるし、彼の学問上の仕事は破壊されてしまう。彼のもの

としてはただ不義の子のみが残されることになる。諸々の仮説をあざわらうまさに生の側からの力強い返答である。

いま見たように、学者のドラマにかくも緊密に結びついた個人ドラマのレベルでの証明を検討することは無用かと思われる。けれども、読みの位相はどこにあるにせよ、別の価値体系への滑りが確認される。それは、作品がそれまで積みこまれてきた枠の破壊、パスカルとクロティルドとの結合がその手段でもあれば象徴でもあるところの超越である。近親相姦のテーマはそれゆえ、小説の主要な結節点の一つとして、作品の多様な局面がそれをめざして首尾一貫した展望のうちに組織されるところの消失点としてあらわれる。パスカルが一人の侍女もしくはクロティルドの一友人との間にもうけた子供なら、何の証明にもならなかっただろう。というのもここでは、不道德の弁明ではなく、道徳も科学的仮説ももはや通用しない人生のより深い理解への移行が問題なのであるから。近親相姦を提起し、それを挺子として偏狭な考え方を覆さなければならない。何かを否定したいならば、あなたは、その存在をまず措定しなければならないというあの矛盾のために、である。語からその恥辱のすべてを取り除くために近親相姦を措定するのである。

確かにプラハ、『獲物の分け前』においてはこれを用いて第二帝政期における成金たちの道徳的腐敗——とはいえ、先に見たようにそれは、行為によりはむしろ意識の上での挑戦に存する——を糾弾した。もちろん『ブラッサンの征服』においては近親相姦に準ずる関係の忌まわしい結果を明示した。けれども『パスカル博士』において彼は、道徳上の排斥も遺伝の理論家たちによる留保ももはや容認できると思われないほど高度の生への信仰に到達している。全ては善なのである。その手段がいかなるものであれ、生の仕事をつづける一切のものは、それ自身のうちに自己を正当とする根拠をもっているのである。

科学小説かそれとも形而上学小説か

『ルーゴン・マッカール叢書』には、起源からして二つの側面があった。それはまず一族の歴史をかたる物語であり、他方ではテキストに沿って展開しつつその解釈を提示するテキストに関する注解、メタテキストである。注解者の機能は直接に小説家自身が、あるいは様々の登場人物がこれを引き受ける。と

ころで後者の中でパスカルは例外的に重要な役割を有する。その遺伝による性格のおかげで他の人々とはちがうパスカル医師は、また物語の筋からも離れている。つまり観察者の立場でつねに近くにおいて諸事件に隣り合わせ、場合によっては『ムーレ神父の過ち』においてのように実験的に事件を引きおこすとはいえ、それ以外には介入することを控えている。しかしその間、物語の次元で生起する全ては医学者によってファイルに記録され、リストに記載され、分析される。その意味で叢書最後の小説は、遺伝の諸理論との関連で登場人物たちを分類し、彼らの性格や振舞いや他人との関係を説明し、驚くべき解説と総合を試みることによってサイクル全体に関する注釈を読者に提供するものであって、優れてメタテキストとしての機能を果たしている。

けれども小説は、当の関連書類がいわば賭金となった物語でもある。というのは、パスカルの敵対者たち（母親フェリシテおよび侍女マルティーンヌ）がこれをまんまと奪いとり破棄することができるかどうか、それとも彼がそれを保存しおおせるかどうかが問題だからである。小説は『ルーゴン・マッカール叢書』の一解釈であると同時に、その意味をめぐる闘争の物語を提示するのである。なぜならば、一度一件書類が破棄されたなら、そして一族の栄誉にとって厄介な証人たち（ディド、マッカール）が姿を消したなら、フェリシテは自由に思うがままに歴史を作り直すことができるからである。作品全体の解釈が新たな作品の劇的な山場を構成している。言い換えれば、メタテキストが、それを問題化するテキストの内に取りこまれているのである。

ところで、パスカルの科学上の仕事は焼却されるであろう。そのことは、ゾラが自分の小説作品を構築するために支えとした解釈のシステムを破棄するということであろうか。事態はそれほど単純ではない。もちろん一つの区別は必要である。つまり物語の世界において、パスカルは死んで関連書類は破棄されても、それはメタテキストによる解釈の機構が否認されることを意味しない。しかし、ゾラが自分の「もう一人の自己」（アルテル エゴ）、象徴的分身、自分の模範とするつもりでいた科学者を死なせるのは、もしかしたら何らかの意図があつての選択ではないのか、と問うことはできる。

方法はその対象を作り出す。あるいはむしろ、方法とその対象との間には相関関係がある。家系の歴史は遺伝の理論なくしては解釈され得ない。逆に、遺

伝の理論は、血縁の例に支えられることによってはじめて真価を発揮する。パスカルの提案する処方家族小説にしか適用できない。ところが小説はとつとに家族の枠をはみ出している。『ルーゴン・マッカール叢書』の読みを進めれば進めるほど、血筋はいくらかの遺伝的素質の細かい糸へとますます縮小されていき、それらは他の新たな地理的・人的環境でうごきまわる個人たちを結びつける。作品が進展すればするほど、物語を家族の年代記へと軌道修正しようと企てる数少ない小説を例外として、メンバーは社会のあちこちにますます分散し（例えば『ジェルミナル』のエティエンヌ・ランティエ、『作品』のクロード・ランティエ、『大地』のジャン・マッカール）、そして遺伝形質による説明よりも環境の鉄則による説明がいつそう優勢になっていく。この進展は『居酒屋』と『ごった煮』とにおいてすでに顕著であった。そこでは、遺伝法則の観察は消えて、社会学的法則の表明がとってかわるのである。

ところでこの新しい方法のためには、観察の場を大幅に拡大する必要があった。それはもはや単一の家系に限るわけにはいかない。それゆえいくつかの別の家族集団が現れてくる。例えば『生きる喜び』のシャントー家、『ジェルミナル』のマウ家そして『大地』のフアン家である。これらの人々のドラマがルーゴン・マッカール家の人々のそれに付け加えられ、人々は密着しあう。彼らの個人としての運命は重なりあって、象徴的に社会階級の運命を表象することになる。『ごった煮』における有産階級の家の場合がそうで、そこにはブルジョワ家庭の可能なかぎり多くの見本が集められている。『ジェルミナル』のアパートの場合もそうで、下の階から上の階へかけて、プロレタリア家族の荒廃がたどるあらゆる段階が描かれている。

もう一つ別の水準でも、作品はもはや単に一社会集団の変転だけを描くのではなく、生物の一種としての人類のそれを描いている。その証拠となるのはアルトーの住人たちである。彼らは社会の掟を無視してつるみ合い繁殖し、神秘的な生の定めに、それも自ら知ることなく従っているのである。ここで輪は完成される。しかしそれは、螺旋の場合のように一段上の段階においてである。

『ムーレ神父の過ち』の楽園寓話で驚嘆すべき形のもとに表現され、『パスカル博士』において再確認されるこの生の宗教は、一切の説明のシステムを超越している。われわれはいまや一つ別の次元、すなわち信仰の次元に位置して

いる。そこではもはや正当化することではなく、宣言することこそ肝心なのである。科学的な基盤にもとづく社会の記述として企てられた『ルーゴン・マッカルル叢書』は、形而上学的信仰告白（クレド）となって完結をみる。

以上のような枠組みの中で、近親相姦は単に可能であるのみならず、必要ですらあり、さらに正当とされなければならない。なぜ「可能」なのか。それは、小説が今や科学上の仮説が適用されていた枠をはみ出すからであり、「必要」なのは、非合理的なものあるいは非人道的なもののみが自然の掟を象徴しうるからであり、「正」とされるのは、認識の対象となる前からすでに自然は、ゾラにとって崇敬の対象となるからである。そしてそれゆえに、近親相姦という語は用いられさえしなかったのである。というのも、それは二重の意図、すなわち放棄される科学的基準として描写の意図に、また失効した道徳的原理の名において教示の意図に込めるものだからである。

結 論

近親相姦のモチーフは、他のいかなるモチーフにもまさって科学的言説と神話的言説とのあいだに潜在している矛盾を開示する。前者は『叢書』にとって記述の上で公式の案内役を果たすのにたいして、下層にある後者は、マールテン・ヴァン・ブーレンが見事に示したように⁴⁰⁾、物語のレトリックの内につねにあらわれていて、ついには不可解な事故の形をとって物語の水準にまで浮かび出てくる。

『パスカル博士』はこの浮上の物語であって、科学的・理論的機構の崩壊と神話の勝利とを物語る。近親相姦は、本人はおそらくその必要性を意識しなかったであろうが、ゾラの想像において少しずつ重要性をおびていくことを我われは見た。しかし『大地』とか『ムーレ神父の過ち』のような作品を読むならば、この種の行為が重きをなすのは、それは、自然が絶えず自己再生してゆくあの盲目の力の表現そのものであるからだと容易にわかる。近親相姦だけではない。はなはだしく不均衡で、説明不可能で、鬼畜のごとき和合が必要なのであり、そして逆説的にそれは、最も自然にかなない、納得でき、願わしいものとして義とされなければならないのである。けれども科学の側から見れば、逆説が道理に合わないことにかわりはない。そこにこそ不条理を軽減する努力が、

そして近親相姦を正当化する一方で、あたかも問題は存在しないかのごとく振舞う努力が、そしてまた、真の血族関係がない以上はアンセストはあり得ないことを読者に説得するための科学的論議の展開も由来する。

神話は科学を蝕んでいる。だが最後の努力で、神話を容認させるためには科学の能力が必要とされることになる。理屈っぽい理性はそれ自身を否認するところの想像を正当化しようと試みる。けれども、徹底的に科学を利用したあとで、一族の伝説（サガ）に示唆されるあらゆる展開をすべて科学的予見としてうまく押しつけおおせた後で、ゾラは自分の分身を——パスカルという登場人物だけではない。フィクションの科学的基盤の全てであるファイルをも——消滅させる。こうしてフィクションそのものに勝利をおさめさせる。締め括りの言葉は、科学者ではなく小説家に帰せられる。

注 釈

- 1) エミール・ゾラ『ルーゴン・マッカール叢書——第二帝政下における一家族の自然・社会史』、アンリ・ミットランによる校訂版、ブレイヤッド叢書、第一巻、パリ、ガリマール社、1960年。副題については『ルーゴン家の繁栄』の序文、同第一巻、4頁参照。〔タイトルは直訳すれば『ルーゴン・マッカール家の人々』の意。その全 20 巻は1871—1893年の出版。なお翻訳において、いくつかの長大な段落は二三の段落に切断したこと、同じくいくつかの段落中の長い引用文は独立引用文に変更したことをお断りする。訳注〕
- 2) クロード・レヴィ＝ストロース『親族関係の基本構造』、ムートン社、1967年、20頁。
- 3) 1869年のパスカルの素描（アンリ・ミットランによる『パスカル博士』に関する研究、ブレイヤッド叢書、第五巻、ガリマール社、1967年、1568頁参照）。
- 4) 『獲物の分け前』（1871年）。同じくミットランによる研究、ブレイヤッド叢書、第一巻、上掲書、1583頁参照。
- 5) テゼ——不義を讃え、不貞を喜ぶ碌でなしどもにでも縋ったらどうだ。恥も道理も知らぬ裏切者か恩知らずでもなければ、お前のような人でなしを庇ってくれるものか。イッポリット——いつまで不貞不義呼ばわりをなさるのです。

（ラシーヌ『フェードル』（1677年）、第4幕第2場）

フェードル——このからだからは、不義と騙りの毒気が吹く。（第4幕第6場）

フェードル——純潔で礼儀正しい御子様ですが、よこしまな道ならぬ想いをおかけしたのは、このわたしでございます。(第5幕第7場)

(ラシーヌ『全集』、ブレイヤッド叢書、第一巻、ガリマール社、1960年)。『フェードル』の利用については『獲物の分け前』、上掲書、508-509 頁参照。〔引用は内藤濯訳、岩波文庫、昭和34年(第3刷)、75、82、99頁による。なお訳文中の「不義」は「inceste」(近親相姦)の、「不貞」は「adultère」(姦通)の、そして「道ならぬ」は「incestueux」(近親相姦の)のそれぞれ訳語である。訳注〕

- 6) 『獲物の分け前』、上掲書、481頁。
- 7) 同上、481頁。(糞尿のまじる)厩肥ないし堆肥との同じ比較は『大地』にも見られる。それは汚らしい付帯観念にもかかわらず、何よりも肥沃や豊穡を象徴する。
- 8) 同上、481頁。
- 9) 同上、488頁。
- 10) 同上、483頁。
- 11) 『ブラッサンの征服』、ブレイヤッド叢書、第一巻、970頁。
- 12) 『ムーレ神父の過ち』、ブレイヤッド叢書、第一巻、1231-1232頁。
- 13) 『大地』、ブレイヤッド叢書、第四巻、ガリマール社、1966年、391頁。
- 14) 同上、484頁。
- 15) 同上、578頁。
- 16) 同上、484頁。
- 17) 『バルカル博士』、ブレイヤッド叢書、第五巻、上掲書、1052頁。
- 18) 同上、1053頁。
- 19) 同上、1052頁。
- 20) 同上、920頁。
- 21) 同上、1061頁。
- 22) 同上、934頁。
- 23) 同上、1020頁。
- 24) 同上、1021頁。
- 25) 同上、1021頁。
- 26) 『ルーゴン・マッカール叢書』、『序文』、第一巻、上掲書、4頁。
- 27) アンドレ・トゥリエの『日記』(『バスカル博士』)に関するミットランの研究、上掲書、

1618頁参照)。

- 28) ポール・ジニストリの『ジル・ブラス』誌の記事、同上ミットランの研究、1616頁。
- 29) ジョルジュ・ペリシエの『ルヴェ・アンシクロペディック』誌の記事、同上、1618頁。
- 30) E.ルドランの『レクレール』誌の記事、同上、1616頁。
- 31) ゴンクール兄弟『日記』(1890年3月12日付)、同上、1569頁。
- 32) 同上、1581頁。
- 33) 同上、1584頁。
- 34) 『パスカル博士』、上掲書、1018頁。
- 35) 同上、1219頁。
- 36) 同上、1218頁。
- 37) 同上、1219頁。
- 38) 同上、1220頁。〔著者のあたえる p.1210 は誤植。なおこの引用文は作品の、そして叢書の文字どおり最後の文である。訳注〕
- 39) 『パスカル博士』に関するミットランの研究、上掲書、1609頁。
- 40) 『パスカル博士』、上掲書、948頁。
- 41) 同上、1062頁。
- 42) 同上、1062頁。
- 43) 同上、1084-1085頁。
- 44) 〔著者はダヴィデの侍女の名を Abigail と誤記している。ゾラのテキストでは Abisaïg。作品テキストでのアビシヤグへの言及箇所については「人物総目録」、ブレイヤッド叢書、第五巻、1795頁参照。ただしゾラも、ボドメール草案 (fos 16-19) では Abigail と表記していた (ミットランの研究、上掲書、1584頁)。なお、『旧約』の3組の事例については、それぞれ「列王紀略上」第I章;「創世記」第XII、XVI-XVII章;「ルツ記」第II-IV章参照。訳注〕
- 45) 『パスカル博士』、上掲書、1049頁。〔著者が言及しているほぼ同じ文章の再出現は同書1079頁に見られる。訳注〕
- 46) マールテン・ヴァン・ブーレン 『エミール・ゾラの『ルーゴン・マッカール叢書』: 隠喩から神話へ』、コルティ社、1986年。